

京都市内出土の東南アジア陶磁について

—柳馬場通竹屋町出土のベトナム陶磁を中心に—

能芝 勉

1. はじめに

京都市埋蔵文化財研究所が、1992年12月から1994年1月まで実施した中京区柳馬場通竹屋町通下る（平安京左京二条四坊十一町、以下二条四坊という）の発掘調査⁽¹⁾において、江戸時代前期の遺構を中心にしてベトナム産の陶器が出土した。調査終了時には2000箱にのぼる膨大な遺物の中に紛れており、整理作業の段階ではじめて確認されたものである。当初1、2点の破片の散発的な出土品と考えたが、その後、中・後期の遺構や整地層などからも接合する破片が見つかり、総計で15個体近くに達した。またその他にも具体的な産地は明らかでないが、東南アジア産の可能性が高いと考えられる陶磁器も抽出した。

京都市内出土の東南アジア産の陶磁器として、最初に紹介されたものに、ベトナム産の焼締陶器の蓋がある⁽²⁾。これは、当研究所が1989年に中京区三条通柳馬場東入る（左京四条四坊）で行った立会調査の際、出土したものである。しかし、堺環濠都市遺跡や大坂城下町遺跡など、他の近畿地方の近世都市遺跡と比べ、出土する東南アジアの陶磁器が極端に少なく、これまでは手掛かりとなるような基礎資料が皆無の状態であった。このような状況のなかで、今回の調査で出土したベトナム陶器は、量的に充実し資料的価値も高いと考えられる。そこで、本稿ではこの出土資料を中心に紹介し、併せてこれまでに京都市内で出土した東南アジア産と推定される資料もまとめておきたい⁽³⁾。

2. 二条四坊の江戸時代概要

調査地の各時代の概要はすでに報告されているので、ここでは出土したベトナム陶磁器に関連する江戸時代の遺構と遺物について記しておきたい。

桃山時代から江戸時代前期の遺構は、主に町屋に関連するものである。町屋跡は竹屋町通・富小路通に8軒、柳馬場通に3軒それぞれの通りに面して確認できる。各々の町屋の基本的な形態は、掘立柱もしくは根石建物で、井戸、石組土塋などが各町屋の境界に接するように配され、最も奥まったところには大型の方形土塋がつけられている。この土塋はゴミ穴として利用

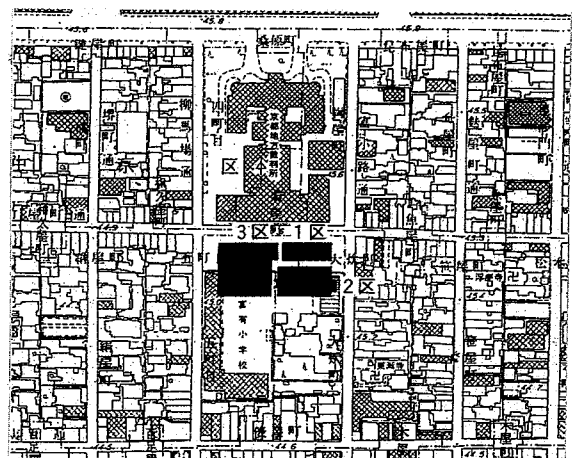


図1 調査位置図（1：5,000）

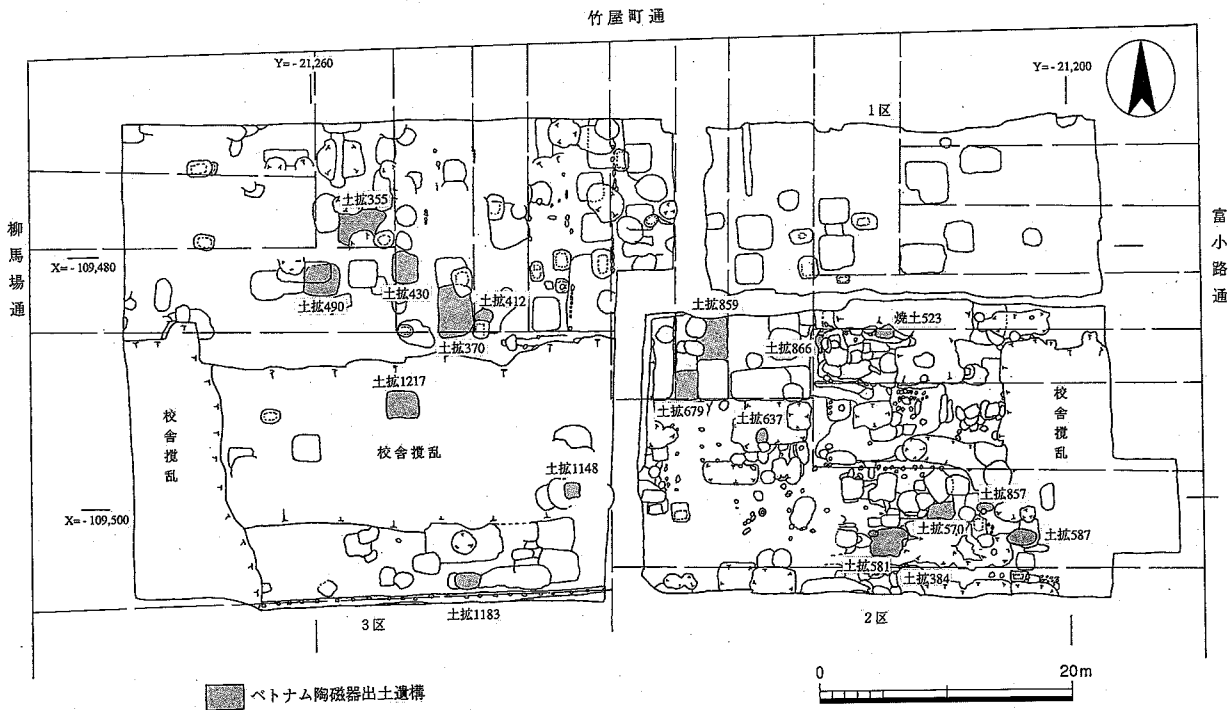


図2 桃山・江戸時代前期遺構平面図（註-1文献より 一部改変）

されており、出土遺物は土師器、陶磁器をはじめとして、金属製品、石製品、骨角製品など多岐に及ぶ。また、この時期には特定の遺物が多量に出土する土壌がみられ（2区の土壌850が土製の釜鍋類、3区の土壌355が丹波産を中心にした播鉢、平鉢類）、その町屋の性格がある程度推定できるものもある。また3区の南端で検出された布掘柱列は、寛永十四年（1637）の「洛中絵図」、金森出雲守屋敷の北限屋敷境と推定される。秀吉の天正地割りによる大規模な都市改造以後の、大名屋敷と町屋が混在する都市構造が確かめられた。またこの屋敷境の位置は四行八門制の北二・三門の境界とほぼ重なり、平安京以来の宅地割りもなお存続していたものと考えられる。以後、中期以降だけでも、火災や洪水による整地層が四面以上にも及ぶが、町屋の規模は江戸時代を通じて変わる事はなく、明治期の地籍図とも大きな違いは見られない。ただ町屋の内部構造は、中期以降には井戸・カマド・便所などがある通り庭・土間の整地域と居住域とが明確になる。裏庭の大規模な土壌は見られなくなり、その跡地には土蔵や建物が建つようになる。出土遺物は火災整地層や石組・ルツボ組の井戸、小規模な土壌群からのものが主体で、中期以降のものが全出土遺物の過半数の量を占める。その中には、3区の土壌1151（鏡鑄型・羽口・焼台類）や1区のカマド118（中国磁器・肥前磁器など）の注目すべき一括出土遺物も多いが、反面、錯綜する層位や遺構の重なりによって、明確な遺構に伴って出土した遺物は少ない。

3. 二条四坊出土のベトナム陶器

二条四坊のベトナム陶器について、器形別に概説する。

焼締長胴壺 (図3-1~10)

茶陶のいわゆる南蛮切溜花入として伝世されているものと同じ器形の長胴壺である。胎土の違いによって5種類に分けられる。暗赤褐色できめの細かいもの(1)、灰色で鉄粒を多くふくむもの(2)、灰色で均一なもの(6)、比較的きめ細かい灰色または褐色の土で、灰白色の土と絞胎状に層になるもの(5・7~10)、白色の砂粒を多く含む粗い土のもの(3・4)である。成形の技法は共通するところが多い。轆轤で巻き上げて成形され、内側に強い轆轤目が残る。特に底部付近の断面形は大きく波形の凸凹を呈する。外面の底部に近いところは轆轤目や指痕が残る。上部はナデ調整されており、口縁や肩部は丁寧な仕上げである。口縁部の直下に2条、肩部に1~2条の鋭く深い沈線が巡るが、肩に沈線がなく、口縁の沈線もはっきりしないもの(2)もある。焼成はどれも良く堅緻に焼かれている。肩の沈潜上部に重焼きの痕が残るもの(2・3)があり、焼成時に筒状の窯道具もしくは他の製品を乗せた痕跡である。底部と口縁部の破片ばかりで、全体の高さなどはわからないが、伝世品や他の遺跡の出土品と同じく、大きいものは30cm程度になると推定される。ただし(6)のように極端に口縁径が小さいものは、別の器形も想定できる。なお、図に示したもののほかにも同様な特徴を持つ小破片があり、より多くの個体が出土しているものと思われる。

この長胴壺はベトナム陶器の出土品としては、最も一般的なものである。堺環濠都市遺跡、大坂城下、長崎、博多、江戸など桃山・江戸時代前期の都市遺跡から多数出土例があり、他に伝世されている物も多い。二条四坊の出土遺物をみても、胎土や大きさが様々で、それだけにベトナム中部を中心に、広範囲に焼かれ続けられたことを物語るものであろう⁽⁴⁾。この長胴壺は砂糖・水銀・火薬など、当時の日本では貴重な商品の容器として渡ってきた可能性が強いとされている。それが後になって、南蛮渡りの珍奇なものとして、花入などに見立てられ伝世されてきている。しかし、この調査での出土状態は、茶陶として伝世されたことを積極的に示すものではない。

焼締広口鉢 (図3-11・12)

広口で鐺になる口縁部をもつ、糸目メ切建水として伝世されているものと同様の鉢である。(11)は口縁部の破片が小さく、口径は確かなものではないが、伝世されているものに比べると大振りである。この大きさのものが堺環濠都市遺跡で出土している⁽⁵⁾。T字形に引き出された鐺状の口縁から、S字状に続く体部外面に横方向に糸目をつける。口縁から内面にかけては雑にナデ、口縁端部には浅く凹線を2条めぐらしている。作りはガッシリとしており重量感がある。胎土には多量の白色ないし透明の砂粒を含み、内外面に細かい石爆が多い。土は緻密で良く焼締めている。全面赤褐色であるが、火裏の部分の破片は暗褐色になっている。

(12)は(11)と同じ糸目メ切形の鉢の底部である。体部に鋭い工具で糸目を引き、底部は雑なケズリとナデ、内面は表面の砂粒を沈めるようにナデる。器壁は体部中央が薄く、丸みのある底部にかけてやや厚くなる。(11)に比べて器壁が薄く持ち重り感はない。胎土は明るい赤褐色で多量の砂粒を含み、外面に出ているものは一部剥がれ落ちている。焼成は良く、内外面共に暗赤褐色を呈するが、底部外面は重焼きのためか明るい色調になっている。この種の陶片はベトナム

土器番号	遺構・層位	器種	共伴遺物	遺構年代	備考
1	3区方形土塋30	焼締長胴壺(切溜)	肥前京焼・信楽・京焼	18C代	
2	3区大土塋355	焼締長胴壺(切溜)	備前・唐津・中国染付	17C前半	土塋420と接合
3	2区第3層(焼土層)	焼締長胴壺(切溜)	京焼・焼塩壺(泉湊伊織)	18C後半	天明大火層?
4	3区ルツボ井戸199	焼締長胴壺(切溜)	唐津・信楽・鉄釉陶器	18C後半	
5	2区土塋679	焼締長胴壺(切溜)	美濃鉄釉・初期伊万里	17C前半	土塋857と接合
6	2区土塋866	焼締長胴壺(切溜)	美濃・中国染付・唐津	17C初め	
7	3区大土塋490	焼締長胴壺(切溜)	織部・唐津・瀬戸	17C前半	
8	3区方形土塋1217	焼締長胴壺(切溜)	中国染付・唐津・瓦灯	17C前半	
9	2区土塋859底	焼締長胴壺(切溜)	志野・唐津・美濃・丹波	17C前半	5と同一個体?
10	2区大土塋587・1層	焼締長胴壺(切溜)	肥前京焼・鉄釉陶器・人形	18C代	
11	2区焼土523	焼締長胴壺(縄縵)	京焼・肥前京焼・肥前磁器	18C初め	宝永大火層?
12	2区土塋637	焼締広口鉢(糸目)	肥前京焼・ルツボ	18C代	土塋591・570と接合
13	3区土塋1183	焼締広口鉢(糸目)	波佐見青磁・唐津・肥前磁器	17C後半	検出中と接合

表1 左京二条四坊出土のベトナム陶器一覧表

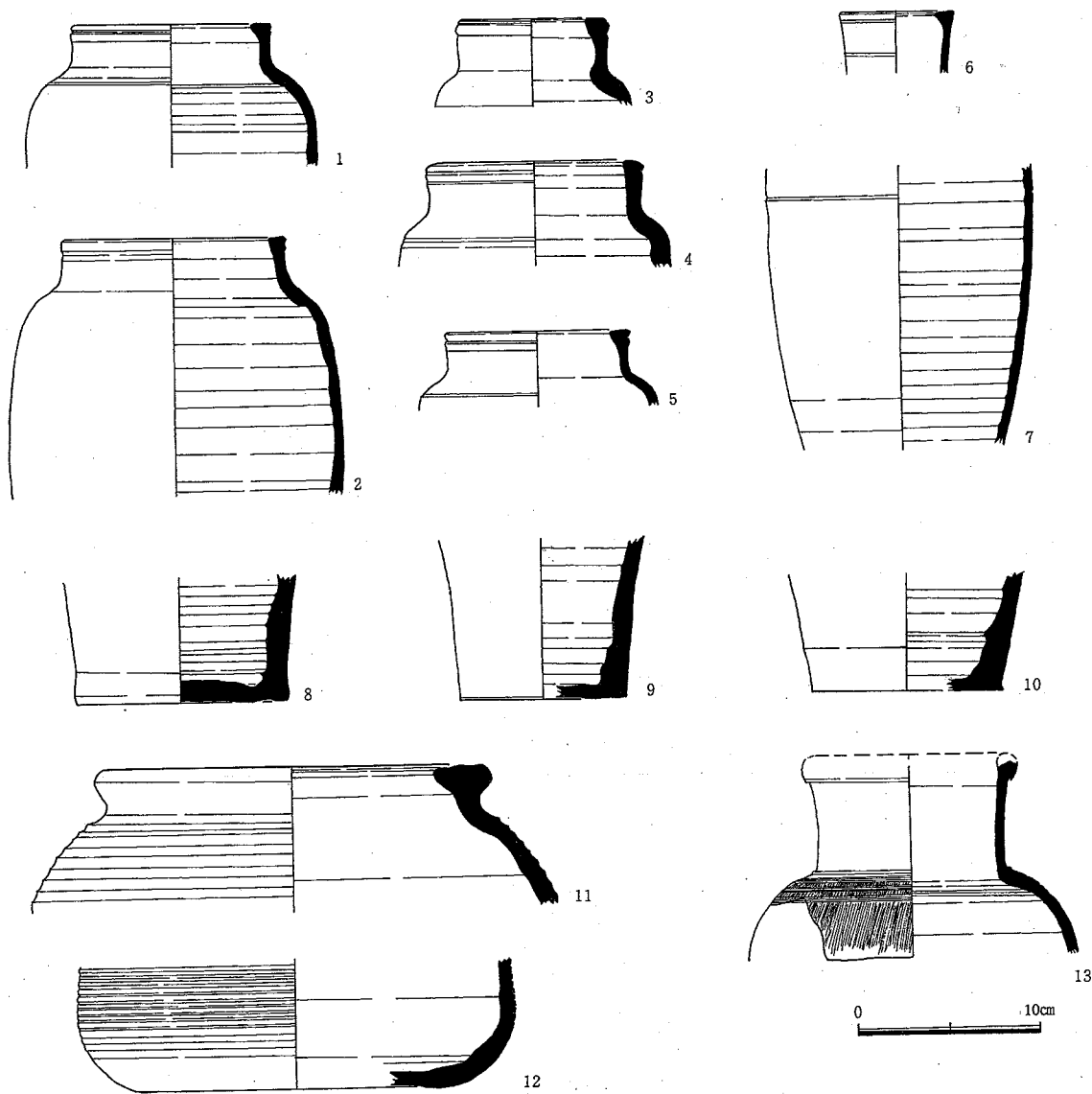


図3 左京二条四坊出土のベトナム陶器実測図

ム中部の遺跡や窯跡で採集されており、その付近の製品といわれている。

焼締長胴壺 (図3-13)

肩口に細かい櫛目による施文をした縄簾と呼ばれる壺である。9個の口縁部と体部の破片が3個所の遺構から出土したがいずれも小片で、灰色と白色の層になる特徴的な胎土から同一個体と判断した。復元口径は12cmで、高さは不明である。

4本一単位の細く鋭い平行線を片口に3本巡らし、頸部と肩部の境に削り出した突帯部が巡る。内面には幅1cm未満の密な轆轤目が肩口まで残るが、外面と頸部内面はナデ消されている。口縁部はほぼまっすぐに立ち上がり、端部は外側に折り曲げて肥厚させて丸くおさめている。焼成は良く、温度が高かった為か気泡が所々にみられる。外面は須恵器のような青灰色になっているが、内面は灰色と白色の層になっている胎土がそのまま見えている。この長胴壺は堺環濠都市遺跡に出土例が4点と大坂城下町遺跡などの出土例がある。前述の切溜形の壺に比べて出土点数が少ないが、同じような文様構成で器形の異なる壺も大坂城下町遺跡から出土している。後述の左京北辺三坊の遺物も同じタイプのものであり、北ベトナムが産地とされている。

4. その他の産地不明陶器

二条四坊の出土遺物には、この他にも東南アジア産ではないかとおもわれる陶磁器が数点ふくまれている。筆者の見識不足でそのすべてを紹介することはできないが、そのなかで江戸時代初頭の大土壙から出土した、器形や胎土に共通する点の多い焼締陶器の壺と、褐釉陶器及び染付陶器の蓋を紹介したい。この遺物は将来調査研究が進めば、日本産である可能性も含めて訂正を要する点もあると思われるが、現在のところベトナムを中心とした東南アジアに産地を想定しているものである⁽⁶⁾。

焼締壺 (図4-14~17)

出土した焼締壺はある程度形を復元できるものが4個体ある。江戸時代初頭の3区の近接する大土壙から出土した。口縁部の作りに特徴があり、極端に短い頸が付き一見すると芋頭のような形をしている。わずかに残る底部から底径が口径よりも大きく、板起こしでべた底に作られていると思われる。内外面とも轆轤目が残るが内面は後で雑にナデられ、外面は意識的に轆轤目が残されているものがあり(14・15)、(17)のように糸目状にしているものもある。胎土は白い砂粒を含んだ細かい砂質で共通しており、よく焼締まっている。口縁端部に重焼きのあとがあり、口

土器番号	遺構	器種	共伴遺物	遺構年代	備考
14	3区大土壙355	焼締陶器壺	初期伊万里・美濃・瀬戸	17C前半	
15	3区大土壙355	焼締陶器壺	初期伊万里・美濃・瀬戸	17C前半	
16	3区大土壙430	焼締陶器壺	唐津・織部・中国染付	17C初頭	
17	3区大土壙370	焼締陶器壺	唐津・美濃・中国染付	17C初頭	
18	2区土壙581	染付蓋	京焼・肥前磁器・鉄釉陶器	18C以降	土壙384と接合
19	3区土壙1148	褐釉壺	京焼・中国染付・肥前磁器	17C代	

表2 左京二条四坊出土の産地不明陶磁器一覧表

合せもしくは逆さまにして焼かれたものかもしれない。(16・17)と同じ形のものが堺環濠都市遺跡から出土しており、年代もほぼ同じである⁽⁷⁾。ただ(15)のようにくの字に屈曲する口縁を持ち、大きさもほぼ同じ壺が16世紀頃の丹波産に見られること⁽⁸⁾、この壺が出土した土壌355に、丹波産の播鉢や平鉢が突出して多いことなども考えあわせると、丹波産の可能性もあり今後の検討課題としたい。

染付陶器蓋 (図5-18)

口径17.2cm、器高5.7cmの皿形で、高台のような鈕をもつ染付の蓋である。受け部は外側に張り出すようにシャープに削り出し、返りを短く細く作っている。全体に作りが丁寧で精巧な感じのする蓋である。胎土は黄白色でごく微量の鉄を含み、柔らかい感じがする胎土である。中央が平たくやや凹む鈕部

分には、二重の圈線のなかに崩れた菊花のような文様を描き、回りは花唐草で埋めている。罎縁上面には斜線と雲の文様が交互に配される。青味を帯びやや白濁した透明釉が罎面まできっちりと掛かっており、荒い貫入が全体にみられる。破断面の観察では釉下の白化粧はみられない。焼

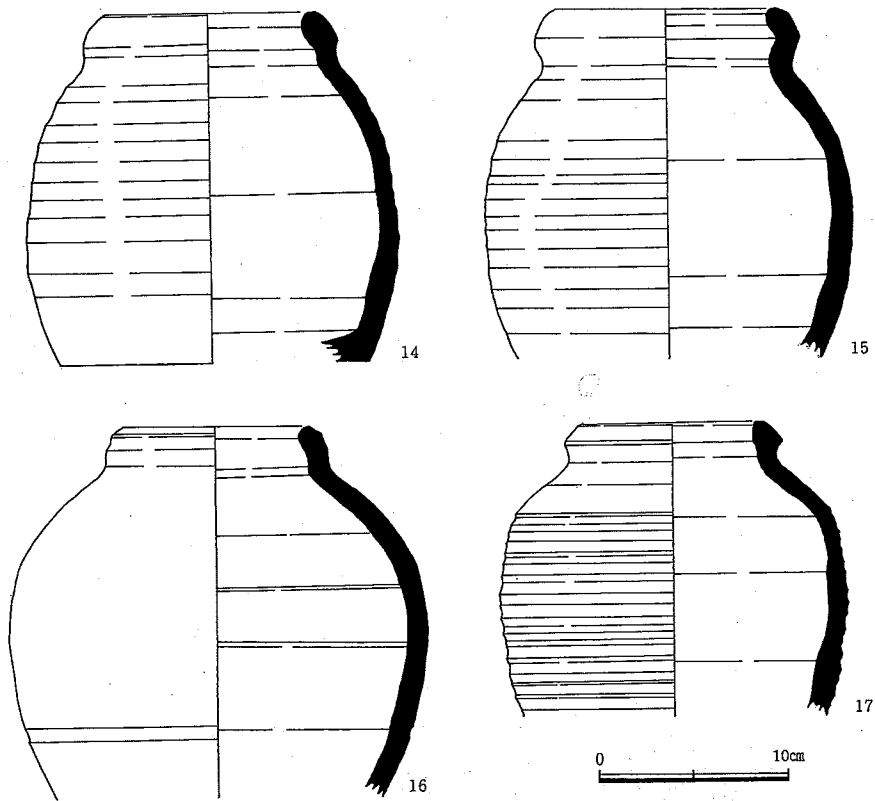


図4 焼締壺実測図

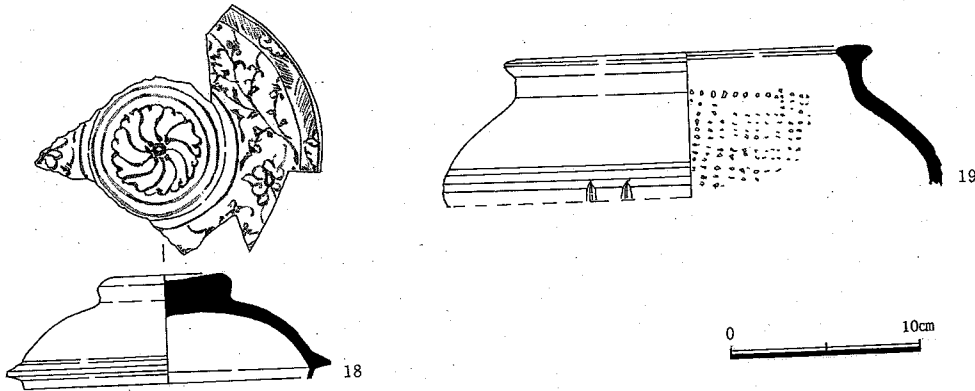


図5 施釉陶磁器実測図

成は均質でしっかりと焼き上がっており、表面は光沢がある。身との合わせ部分には一部漆が附着しており、容器を密閉する必要のある品物が入っていた可能性もある。18世紀代の遺構から出土している。この蓋を伴うと思われる身が出土しておらず、出土品や伝世品にも類例が見つからないので、どのような種類の器なのか判然としない。また産地も特定できないが、胎土の特徴からベトナム産である可能性が高いと思われる。

褐釉広口壺 (図5-19)

李朝時代の朝鮮陶器ではないかと迷った遺物で、内外面に褐釉が厚く掛り、復元口径20cm程度の広口壺の口縁部である。特徴的な口縁部から短く頸をつくり、肩に2条の沈線を巡らす。沈線の下に2条一組のヘラで縦方向に強く押さえた痕跡が推定4箇所あるが、下方が欠損しており不明である。内側は格子目の当木の痕が残るが、外面は丁寧にナデてタタキの痕は見えない。胎土はきめの細かい暗赤褐色で、灰白色の土が薄い縞になっている。数箇所に1cm大の白い石が混入しており、石爆になっているところもある。17世紀代の遺構から出土している。類例もなく産地不明であるが、胎土はベトナム陶器特有のものである。

5. 京都市内出土の東南アジア陶磁器

二条四坊以外の京都市内出土の東南アジア陶磁器は、管見の範囲では表2の通りである⁽⁹⁾。既に報告されているものについても今回再見しているが、詳細は各報告書を参照されたい。

焼締長胴壺 (図7-20)

京都府教育委員会が1978年に上京区烏丸上長者町(左京北辺三坊六町)を発掘調査したときのものである⁽¹⁰⁾。調査地は江戸時代前期の糸割符商人、松屋三郎右衛門の屋敷跡に比定されており、寛文元年(1661)の大火に関連した遺物とされている。報告書では産地不明となっているが、ベトナム北部産の、いわゆる縄簾の長胴壺である⁽¹¹⁾。胎土に灰白色の土が絞胎状に薄い層になっている。二条四坊出土のもの(図1-13)と基本的には同じ器形である。ただし、胎土や口縁の作り・肩口の条線・焼上がりの発色などに違いがあり、他の遺跡の出土品を含めて多くのバリエーシ

土器番号	出土地	出土遺構	種類	遺構年代	産地	備考
20	左京北辺三坊(上京区烏丸上長者町)	SE82	焼締長胴壺	17C前半	ベトナム	寛文大火関連
21	山科本願寺跡(山科区西野阿芸沢町)		青磁双耳壺	16C前半	タイ	下限1532年
22	左京四条四坊(中京区三条柳馬場東)	SK15	焼締陶器蓋	17C前半	ベトナム	元和年間
23	左京四条四坊(中京区三条柳馬場東)	SK15	無釉土器蓋	17C前半	タイ	元和年間
24	左京四条四坊(中京区三条柳馬場東)	SK15	無釉土器蓋	17C前半	タイ	元和年間
25	左京四条四坊(中京区三条柳馬場東)	SK15	無釉土器蓋	17C前半	産地不明	元和年間
26	相国寺旧境内(上京区烏丸上立売上)	溝14-1	焼締陶器鉢	15末-16C	産地不明	
27	平安宮(上京区智恵光院下立売)	土取穴	印判染付碗	15末-16C	ベトナム	
28	平安宮(上京区智恵光院下立売)	土取穴	褐釉陶器壺	18C代	産地不明	
29	左京三条四坊(中京区麩屋町三条上)	SK14	印紋土器壺	17C初頭	タイ	
30	左京六条三坊(下京区五条室町西入)	SK707	焼締長胴壺	17C前半	ベトナム	
31	左京六条三坊(下京区五条室町西入)	SK854	四耳壺	17C前半	タイ	

表3 京都市内出土の東南アジア陶磁器一覧表

ヨンがある。

青磁双耳小壺 (図7-21)
 山科寺内町遺跡調査会が、
 1974年に山科西野阿芸沢町
 の山科本願寺跡を発掘した
 際の1次調査で出土したも
 のである⁽¹²⁾。出土遺構につい
 ては具体的な記載がないが、
 報告されている遺物は、お
 おむね寺内町廃絶の頃 (15
 32年) に比定されている⁽¹³⁾。

高さ6.2cm、口径3.0cm、底
 径3.8cmで、最大径が体部上
 方にあり、2つの耳がハの
 字の形に付く壺である。全
 体に雑な作りで、糸切底、
 轆轤成形で短い口がほぼ真
 つすぐに立ち上がる。成形
 後、上から押さえ付けたよ
 うに屈曲部分が体部下方に
 残る。耳は薄い板状のもの
 が小さく付けられている。

混濁した青磁釉が底部を少

し残して厚く掛けられており、一部は釉が垂れて底に及ぶ。壺のほぼ中央から灰緑色と灰黄色に分かれて発色している。胎土は黒色と白色の微粒砂を含む暗灰色で、露胎部の表面は赤褐色である。

日本の出土品に類例はないが、タイ中部シーサッチャナライ窯系の15~16C代の壺に多くの例が見られる⁽¹⁴⁾。年代も一致することからこの壺も同じ産地と考えられる。

(22~25) は1989年に当研究所が、中京区三条通柳馬場東入るで実施した立会調査で出土したもので、そのうち (22) は京都市内で初めてベトナム陶器として認識されたものである⁽¹⁶⁾。相伴遺物は志野・織部・唐津・備前といった茶陶を中心に立会調査としては異例の出土量で、茶陶を商っていた町屋跡と推定されている。共に慶長から元和年間 (1596~1623) にかけての、井戸跡と推定されているSK15からの出土品である。輸入陶磁器には他に中国明代の青花、李朝青磁、華南三彩盤などがある。

焼締陶器蓋 (図7-22)

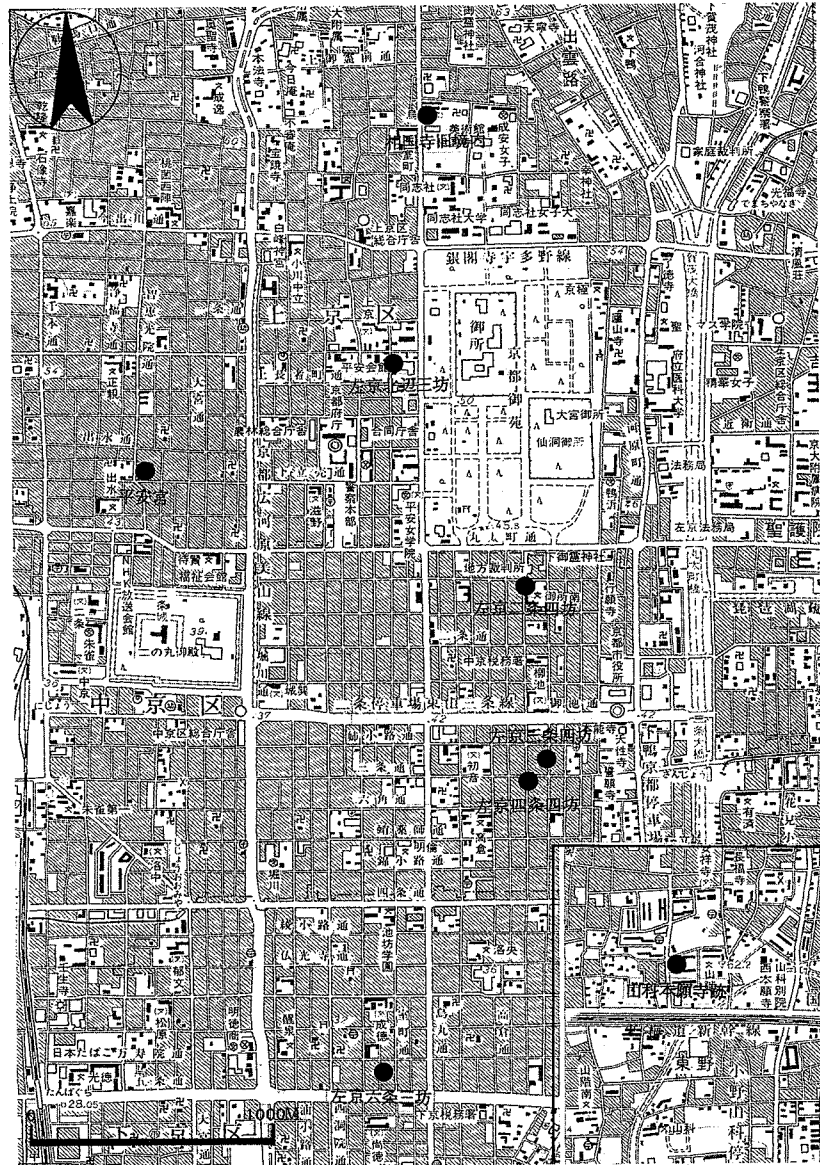


図6 京都市内出土の東南アジア陶磁器出土位置

5段に削り出された宝珠形の鈕が付く浅い皿形の蓋で、口縁部は欠損しており不明であるが、残存部で13cmの幅を持つ。全体のバランスから16~17cm位の口径の身に付くものとおもわれる。轆轤成形で外面は雑なナデ調整、少量の砂粒を含むやや粘性のある細かい胎土で焼成もよい。外

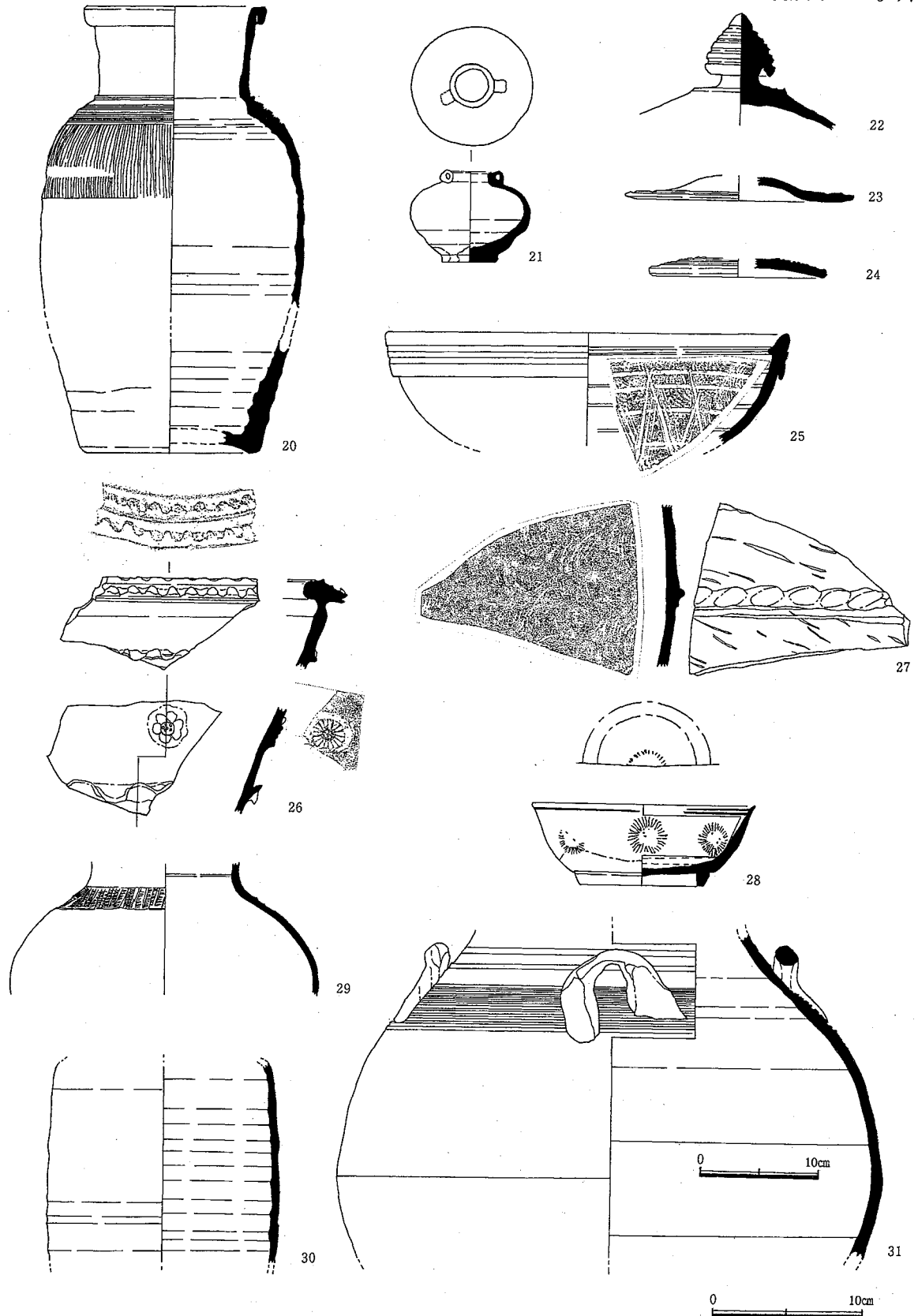


図7 京都市内出土の東南アジア陶磁器実測図

能芝 勉

面茶褐色、内面は赤褐色で全体に手慣れた作りを感じさせる。本来どのような身が付いていたのかわらかではないが、茶陶ではメ切形の水指と合せられていることが多い⁽¹⁷⁾。

無釉土器蓋 (図7-23)

復元口径15.3cmの中央部を笠のようにした蓋で、端部の内外面をケズって円形に仕上げている。外面平坦部には渦巻状に沈線を施す。本来は鈕が付くと考えられるが、残存部にその痕跡は見られない。土師質であるが良く焼締まっており硬質である。胎土は赤褐色と白色の土が縞になっており、砂粒の混入は少ない。鈕が残っておらず確たるものではないがかぶせ蓋に復元しておく。

無釉土器蓋 (図7-24)

ほぼ一文字形に作られた蓋で、復元口径は12cm。外面はナデ調整の後、同心円の浅い沈線を等間隔に巡らし、内面は未調整である。色調や胎土は(23)と同質であり焼成も良い。端部には焼成後に削られた痕が見られ、身との合わせ具合を二次的に調整されたものと考えられる。(23・24)ともに類例がないが、茶陶のいわゆるハンネラと呼ばれているものでタイ産であろう。伝世されている水指には蓋と身が別個体のものも多くあり、この調査で出土した蓋も転用する目的で残されたものが廃棄されたと考えられる。

焼締陶器鉢 (図7-25)

端部を外に折返して口縁部を作り、内側に短く返りを引き出した類例のない特異な形をした鉢である。粘土紐巻き上げ轆轤成形で、外面はタタキのあと雑なナデ、内側はあて木の痕を残したまま横方向に沈線を引いた後で、播鉢のおろし目のような斜格子を付けている。胎土は(23)・(24)と共通しているが、焼上がりは焼締陶器により近く、外面は暗褐色、内面は赤褐色を呈している。本来どのような用途を持つ鉢か不明で、産地も確定できない。復元口径が約27cmあり、茶陶の灰器に見立てられたものとも考えられる。

焼締陶器鉢 (図7-26)

1993年に相国寺旧境内の西限付近(上京区烏丸通上立売上)を発掘調査した際、15世紀末から16世紀中頃と推定される堀状遺構から出土している⁽¹⁸⁾。13点の口縁部と体部の破片が確認されているが、接点がなく全体の器形はわからない。ただ口縁径が推定30cm近くあることと、内面が外面と同じように丁寧調整されていることから、大型の鉢であろうとおもわれる。

T字型に引き出された口縁部は、内側は円く作られ、外側は強く引き出された後鋭い凸線と波状に作っている。口縁上端部もやや引き出しは浅いが、同様に2列の波状と凸線の組み合わせにより装飾されている。体部外面には少なくとも2条の粘土紐を貼り付けた後、指もしくはヘラ状のもので波形にした突帯が巡る。突帯のあいだには数個のスタンプによる貼花文が配されるが、その文様には2種類あり交互に押されたものとおもわれる。内外面とも丁寧にナデ調整されており、成形・タタキは不明。胎土には白色の微粒砂を少量含むが、比較的均一で目立つ程の砂粒の混入もない。外面に沿って1~2mmの幅で暗灰色の還元色になっているほかは赤褐色を呈している。焼成はよく、口縁端部から体部にかけて灰が薄く被る。産地を特定することはできないが、波形と凸線の組み合わせや貼花文の装飾、胎土の特徴からはベトナム陶器を思わせる。

ベトナム陶磁器はその最盛期が15～16世紀とされており、貿易陶磁としても量・質共に最も充実していた時代といわれている⁽¹⁹⁾。しかし、日本では最も出土例が少ない時期の遺物で、このような大型の焼締陶器は類例がなく不明な点が多い。将来、出土資料が最も期待されている時期のものであり、その意味でも重要な遺物である。

(27・28) は共に1995年～1996年にかけて、平安宮内酒殿・釜所・侍従所跡（上京区下立売通智恵光院上る）の発掘調査の際出土したものである⁽²⁰⁾。江戸時代には板倉周防守屋敷の北隣地にあたり、町屋跡に推定されている。共に江戸時代の18世紀代の土取穴から出土している。

褐釉陶器片（図7-27）

内外面に褐釉を掛けた大型の鉢もしくは壺の体部の破片である。外面にはタタキ目が残し、内面には青海波が薄く残る。外面には粘土紐を貼付けた後、斜め上方向に指で波状に押さえた突帯が巡る。一見して朝鮮半島か高取系の破片のようにも見えるが、あまりに大型の器形の破片であり胎土にも違和感がある。この破片と同じものが堺環濠都市遺跡でも出土しており、「産地不明ながら、ミャンマーのマルタバン壺の一種とする可能性もある」と指摘されている⁽²¹⁾。

印判染付碗（図7-28）

高台を大きくしっかりと削りだし、腰から直線的に引き上げてやや器高の低い形に作る、いわゆる「お日様マーク」の碗である。器壁は厚く、手取りも重い。平坦な見込みに蛇の目状に釉剥ぎし、釉剥ぎ部にはわずかに重積みの痕跡が残る。胎土は細かい砂粒を含むが、磁胎に近く焼成も良い。透明感のある灰釉が外面中程まで掛かり、釉が厚いところには貫入が見られる。見込み中央部と外面に鉄釉による花卉状のスタンプを押し、内面の口縁部直下にラフな2本の線を巡らす。この種類の碗は伝世品も多く、大坂城下や堺環濠都市、博多や江戸の遺跡からも出土している。鉄絵スタンプの位置に変化はあるものの、器形は画一化されており、北ベトナムを中心に広範囲に焼かれていたとされている。

無釉印文土器（図7-29）

1995年に中京区麩屋町三条上る（左京三条四坊）において、立会調査出土したものである⁽²²⁾。周辺の他の調査地では多量の茶陶が出土しており、この調査でも備前・信楽・伊賀・唐津の水指、花入など多くの茶陶と相伴している。

頸部から肩部にかけて外側に大きく張り出し、一見して弥生土器のような感じを受ける土器である。体部中央よりやや下部に最大径のある壺で、(23・24)と同様にハンネラとよばれているものである。口縁部が欠損した為か、頸の下部で水平に削り再度口縁を作っている。頸部から肩部にかけて特徴的なスタンプ文が回り、その上下にヘラを押しつけて画線を巡らす。重複の為判りにくいだが、スタンプ幅は約2.3cmである。器壁は体部中央部がわずかに薄くなり、接点のない底部周辺部の破片では再び厚くなる。外面の調整は体部がタタキの後ケズリもしくはナデ、底部はケズリ。内面は丁寧なナデ。胎土は砂粒を多く含み土師器に似ているが、焼成は極めて良く、堅く焼締まっている。底部破片の外面には使用によると思われる煤が付着する。

このタイプの壺は沖縄をはじめ博多・長崎・一条朝倉谷遺跡で出土しており、タイ国内では、

広く日用の煮沸用具として使用されているものである。日本で伝世されているものは、茶陶の建水などに見立てられたものであり、出土地点が茶陶に関係する町屋跡と推定されていることからこの土器にも同様の見立てがあったのかもしれない。ただ、伝世品にみられるような内面に漆や柿渋を塗ったようすはない。

(30・31) はともに京都文化博物館が1994年に下京区五条室町西入る(左京六条三坊七町)での発掘調査で出土したものである⁽²³⁾。武家屋敷もしくは町屋跡と推定されており、ともに17世紀代の遺構から出土している⁽²⁴⁾。

焼締長胴壺(図7-30)

肩部から胴部にかけての破片で、口縁部と底部が欠損するが、切溜形の長胴壺であろう。約1/5が残存している。胎土はキメ細かく、灰褐色と灰色の縞状になっている。これは二条四坊出土のものでは、最も出土例の多いタイプと同じ胎土である。色調は外面が灰褐色、内面が明るい褐色で焼成も良く、これも共通している。

四耳壺(図7-31)

タイ、イノ川窯系産とされる四耳壺の肩部の破片である。この壺の特徴となっている耳部とその下に施された沈線部が残存している。胎土は赤褐色で鉄粒や白砂粒を多く含み、ややキメが粗い。外面には薄く褐色の釉が塗られている。京都市内では初出のものであるが、堺環濠都市遺跡や大坂城下町遺跡では出土量は多く、特に16世紀末以降の出土タイ陶磁器ではその殆どを占めている。またこの調査地のようにベトナム産の長胴壺と共に出土することも多い。

6. まとめ

以上、二条四坊と京都市内出土の東南アジア陶磁器について紹介したが、整理過程で気が付いた問題点や、今後の課題について若干触れてまとめにかえたい。

平安時代以降、政治的中枢であり続けた京都は、また日本最大の商工業都市であり、当然、国内外の物産の集積する地でもあった。にもかかわらず、京都市内の東南アジア陶磁器は、産地の不明なものを含めてもせいぜい30点程度が確認できたに止まり、少量の資料で出土傾向や出土状況を検討するには不十分である。ただ、江戸時代以前の(21・23)が有力寺院跡から出土していること、17世紀以降のものが町屋跡に出土する傾向は、当時の実質的な経済力の反映と見ることできる。また(22~25)・(29)が多くの茶陶と共に出土したことは、東南アジア陶磁器が茶陶の「南蛮」ものとして伝世していることを裏付ける資料として注目される。

16世紀中頃から17世紀初めは、近畿地方でもベトナムの青磁、鉄絵、白磁、青花といった碗・皿類が多く出土する時期である⁽²⁵⁾。この時期のいわゆる供膳形態の陶磁器が、今回は確認できなかった。これはこの時期に大量に出土する中国陶磁器に紛れて、認識されていないことに原因があるようにおもえる。二条四坊の整理過程でも感じたことであるが、膨大な遺物の中から一握りの東南アジア陶磁器を抽出するには、多くの時間が必要であった。特に壺・甕類の陶製容器は多種多様のものがあり、産地の判断に苦しむものが多く特徴的な器形・胎土のものが抽出できたに

留まる。

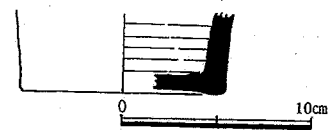
いずれにしても、これまでに京都市内で行われた発掘調査の件数に比較して、今回検討できたものは僅かであり、当然多くの遺漏があるものと思われる。今後の調査研究の過程で追加訂正されれば幸せである。

末筆ながら、本稿をまとめるにあたって次の方々に御協力、御教示を得た。記して謝意にかえさせていきたい。

内田好昭、菊池誠一、高正龍、幸明綾子、近藤和子、定森秀夫、清水芳裕、チンカオトゥオン、辻裕司、中村敦、永田信一、浜崎一志、松井忠春、百瀬正恒、村井伸也（五十音順／敬称略）

註

- (1) 堀内明博・内田好昭・久世康博・丸川義広・『平安京左京二条四坊』「平成5年度京都市埋蔵文化財調査概要」（財）京都市埋蔵文化財研究所 1996年
- (2) 永田信一・吉本健吾・小檜山一良「大きな宝珠形のつまみのある陶片」『リーフレット京都』66（財）京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館 1994年
- (3) 東南アジア産の陶磁器をいう場合、本来はいわゆる呂宋壺や交趾三彩といった華南系陶磁器も含めるべきであろうが、出土量も多く今回はふれなかった。
- (4) ベトナム陶器の産地については森本朝子氏の「ベトナムの貿易陶磁—日本出土のベトナム陶磁を中心に—」『上智アジア学 特集貿易陶磁研究』第11号 上智大学アジア文化研究所 1993年、「日本出土のベトナム陶磁とその生産」『東洋陶磁』23・24 東洋陶磁学会 1993年の論考に負うところが大きい。
- (5) 「堺環濠都市遺跡調査概要報告」『堺市文化財調査概要報告』第14冊 堺市教育委員会 1991年
- (6) 二条四坊のベトナム陶器は整理検討の過程で、ベトナム中部のホイアンで「日本人町」の発掘を担当された昭和女子大学の菊池誠一氏や、ハノイ国立考古学研究所のチンカオトゥオン氏に見ていただく機会があり多くの御教示を得た。その際、菊池氏よりベトナム出土資料と日本出土資料の比較検討のために、胎土分析をしたい旨の依頼があり、6点の破片を提供した。内訳は図3-2・8・12と図4-17、図5-19、及び焼締長胴壺（切溜形）とおもわれる単独の破片である。そのうち、図4-17、図5-19の2点は産地を明らかにできない遺物であるが、胎土分析によって生産地確定に役立つところがあると考え、菊池氏の御好意により追加させていただいた。
- (7) 「堺環濠都市遺跡・今池遺跡調査概要報告」『堺市文化財調査概要報告』第25冊 堺市教育委員会 1992年。及び、續伸一郎「堺環濠都市遺跡出土の貿易陶磁（1）」『貿易陶磁研究』10 日本貿易陶磁研究会990年
- (8) 林屋晴三『日本の陶磁 伊賀・信楽・丹波』頁90（173） 中央公論 1988年
- (9) 三上次男氏が「15～16世紀のベトナム染付が京都（下京区塩小路遺跡）で発見されているようである。」と「ベトナム陶磁と陶磁貿易」『世界陶磁全集16 南海』に述べているが、具体的な報告書名や調査地の条坊の記載がなく、該当しそうな調査報告・概要などを検討したが確認することが出来なかった。



また、本稿脱稿後に上京区西洞院下立売下る（左京一条三坊四町四） 図8 左京一条三坊四町出土のベトナム産焼締陶器

町)・中京区堀川通錦小路上る四坊堀川町(左京四条二坊十一町)・中京区竹屋町東洞院下る三本木町(左京二条四坊三町)の各発掘調査においてベトナム陶器が出土している。いずれも焼締長胴壺の破片で、切溜形になるものと思われる。このうち左京一条三坊四坊のもの(図8)は17世紀初頭の小土壙から出土したもので、二条四坊出土の(図3-9)と共通する胎土である。

- (10) 平良泰久「平安京跡(内膳町)昭和54年度発掘調査概要」『埋蔵文化財発掘調査概報』 京都府教育委員会 1980年
- (11) 京都府埋蔵文化財研究センターの松井忠春氏の御好意により実見させていただいた。
- (12) 岡田保良・浜崎一志「山科寺内町の遺跡調査とその復元」『国立歴史民俗博物館研究報告』 国立歴史民俗博物館 1985年
- (13) 調査を担当された浜崎一志氏、及び京都大学埋蔵文化財センターの清水芳裕氏の御好意で実見させていただいた。
- (14) タイ陶磁の産地については森村健一氏の「畿内とその周辺の東南アジア陶磁器—新政権成する新輸入陶磁器の採用—」『貿易陶磁研究』11 日本貿易陶磁研究会 1991年 「日本における遺跡出土のタイ陶磁器」『東洋陶磁』23・24 東洋陶磁学会 1993年の論考に負うところが大きい。
- (15) 『インドシナ半島の陶磁器—山田義雄氏寄贈コレクション—』 町田市立美術館 1990年 頁97(494)。『タイ・カンボジアの陶磁』 福岡市美術館 1995年 頁144(参考1)など
- (16) 久世康博「平安京左京四条四坊」『京都市内遺跡試掘立会調査概報』 京都市文化観光局 1989年 以下、特に発掘主体を記載しないものは(財)京都市埋蔵文化財研究所が調査をおこなった。
- (17) 西田宏子「南蛮・島物—南海請来の茶陶—」『東洋陶磁』23・24 東洋陶磁学会 1993年
- (18) 近藤和子「相国寺旧境内」『平成5年度京都市埋蔵文化財調査概報』 (財)京都市埋蔵文化財研究所 1996年
- (19) 註(4)文献に同じ
- (20) 辻裕司・丸川義広・大立目一「平安宮内酒殿・釜所・侍従所跡」『平成7年度京都市埋蔵文化財調査概要』 (財)京都市埋蔵文化財研究所 1997年
- (21) 西田宏子・鈴木裕子「図版目録 参考図2-4」『南蛮・島物—南海請来の茶陶—』 (財)根津美術館 1993年
- (22) 竜子正彦・本弥八郎「平安京左京三条四坊十三町」『京都市内遺跡立会調査概報』 京都市文化市民局 1995年
- (23) 定森秀夫他「平安京左京六条三坊七町—京都市下京区小田原町・東鋸屋町—」『京都文化博物館調査研究報告』第11集 京都文化博物館 1996年
- (24) 発掘調査を担当された定森秀夫氏の御好意により実見させていただいた。その際、沈線と波状の櫛目を持つ焼締陶器の小破片を示された(図9)。器形が推定できず、櫛目が備前のものと判別できないものであったが、赤褐色の胎土からベトナム産の可能性の高いものとしてあわせて紹介しておく。
- (25) 註(4)文献に同じ。

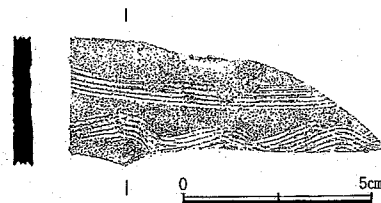


図9 左京六条三坊十三町出土の焼締陶器

参考文献

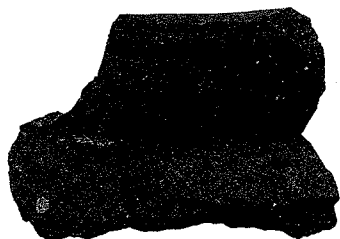
- 矢部良明「タイ・ベトナムの陶磁」『陶磁大系』47 平凡社 1973年
- ジョン・ガイ「ベトナムの陶磁」ブジョン・チャントウエイ「タイの陶磁」三上次男「ベトナム陶磁陶磁貿易」西田宏子「南海陶磁と日本」『世界陶磁全集』16 南海 小学館 1979年
- 奥田豊「遺跡より見た堺の外観」「遺跡より見た堺の茶の湯の成立」『堺衆-茶の湯を創った人びと』 堺市博物館 1989年
- 長谷部楽爾「山田コレクションのインドシナ半島陶磁」『インドシナ半島の陶磁器-山田義雄氏寄贈コレクション-』 町田市立美術館 1990年
- 續伸一郎「堺環濠都市遺跡出土の貿易陶磁(1)」『貿易陶磁研究』10 日本貿易陶磁研究会 1990年
- 金武正紀「沖縄出土のタイ・ベトナム陶磁」横田賢次朗「太宰府出土のベトナム陶磁」有島美江「博多のタイ・ベトナム陶磁」森村健一「畿内とその周辺の東南アジア陶磁器-新政権成立を契機とする新輸入陶磁器の採用-」『貿易陶磁研究』11 日本貿易陶磁研究会 1991年
- 續伸一郎「ベトナム製焼締長胴瓶・四耳壺について-堺環濠遺跡の出土品を中心として-」『貿易陶磁研究』13 日本貿易陶磁研究会 1993年
- 尾崎直人「国内出土のベトナム陶磁」『ベトナムの陶磁』 福岡市美術館 1992年
- 長谷部楽爾「ベトナム陶磁略史」『ベトナム陶磁』 町田市立美術館 1993年
- 長谷部楽爾「東南アジアの陶器-その光と影-」西田宏子「南蛮・島物-南海請来の茶陶」 森本朝子「ベトナムの古窯址」鈴木裕子「技法から見た南蛮・島物-根津美術館所蔵のものを中心に-」『南海・島物』根津美術館 1993年 『日本出土の舶載陶磁-朝鮮・ベトナム・タイ・イスラム-』 東京国立博物館 1993年
- 森本朝子「ベトナムの貿易陶磁-日本出土のベトナム陶磁を中心に-」『上智アジア学 特集貿易陶磁研究』第11号 上智大学アジア文化研究所 1993年
- 西田宏子「南蛮・島物-南海請来の茶陶-」森本朝子「日本出土のベトナム陶磁とその生産」 森村健一「日本における遺跡出土のタイ陶磁器」『東洋陶磁』23・24 東洋陶磁学会 1993年 「日本出土の貿易陶磁-西日本編-」『博物館資料調査報告書4』 国立歴史民俗博物館 1993年 『第4回九州近世陶磁研究会資料』 九州近世陶磁研究会 1994年
- 矢島律子「インドシナ半島陶磁略史-観賞の手引きとして-」『ベトナム・タイ・クメールの陶磁-中村三四郎コレクション-』 町田市立美術館 1994年
- 森毅「徳川期のベトナム・タイの焼物」『葦火』51号 (財)大阪市文化財協会 1994年
- 尾崎直人「タイ・カンボジアの古窯址」『タイ・カンボジアの陶磁』 福岡市美術館 1995年



焼締長胴壺 (図3-1)



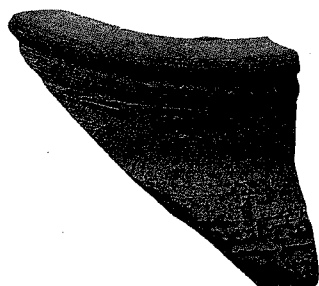
焼締長胴壺 (図3-2)



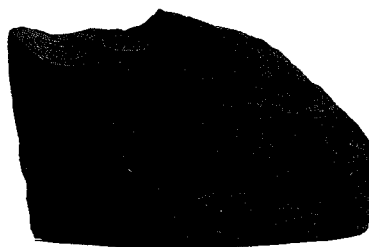
焼締長胴壺 (図3-3)



焼締長胴壺 (図3-4)



焼締長胴壺 (図3-5)



焼締長胴壺 (図3-8)



焼締長胴壺 (図3-6)



焼締長胴壺 (図3-7)

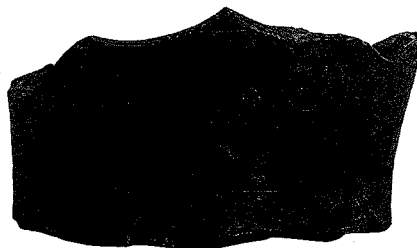


焼締長胴壺 (図3-13)

写真1 二条四坊出土のベトナム陶器



焼締長胴壺 (図3-9)



焼締長胴壺 (図3-10)



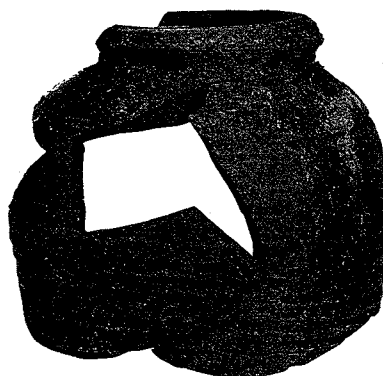
焼締広口壺 (図3-11)



焼締広口壺 (図3-12)



焼締長胴壺 (図4-16)



焼締長胴壺 (図4-17)

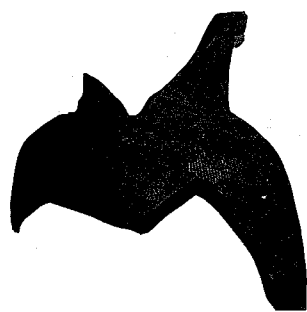


染付蓋 (図5-18)



褐釉壺 (図5-19)

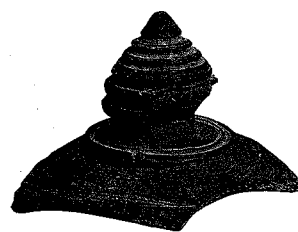
写真2 二条四坊出土のベトナム陶器および産地不明陶磁器



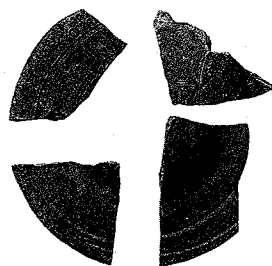
焼締長胴壺 (図7-20)



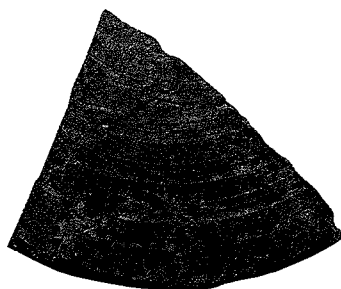
青磁四耳壺 (図7-21)



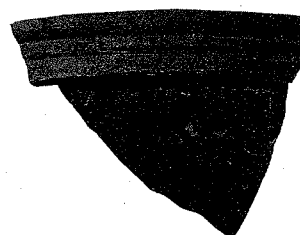
焼締長胴壺 (図7-22)



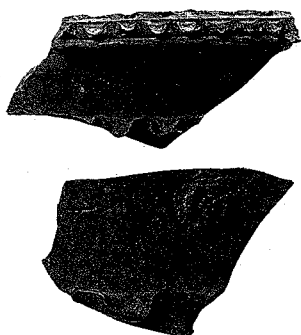
無釉陶器壺 (図7-23)



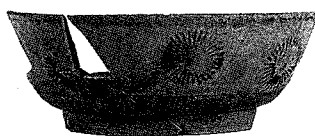
無釉陶器壺 (図7-24)



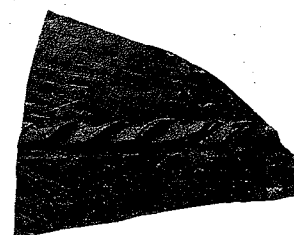
無釉陶器鉢 (図7-25)



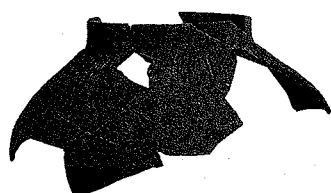
焼締陶器鉢 (図7-26)



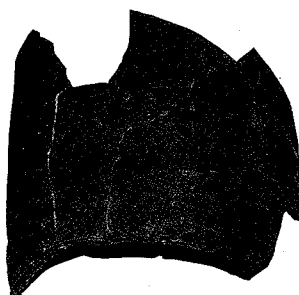
印判染付碗 (図7-27)



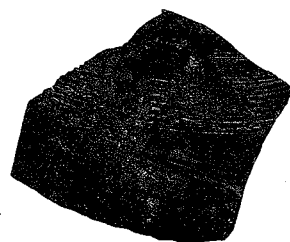
褐釉陶器壺 (図7-28)



印紋土器壺 (図7-29)



焼締長胴壺 (図7-30)



四耳壺 (図7-31)